



手術を終えた猫に顔を寄せるボランティア。「気をつけて帰ってね」と声を掛けている



田舎を経た家の間の手本などは、これまで作業で画面を進めるボランティア



城へ向けて運び出される猫たち

124匹 一斉に避妊去勢

「どうぶつ基金」が筑後市で

る安定剤を注射し、さらに麻酔剤を打つ。続いて抗生素剤を投与。雄は睾丸を、雌は下腹部の毛をそりて消毒する。雌は原毛を脱つ出す。

活動的な運動を生むる野性猫たちは体中にシカツが過ぎ、ノミが飛びはねるブチヂー音を立てる。雌猫は繁殖した事には野生虫がいるめく。「若猫に戻ればなかなか動物病院にも連れていけない。今のうちにドクターに見てあげたい」口業を述べ、ノミやタニの駆除薬を撒り込み、けがの有無や心拍などを何度も確認する。

分足らずで施術していく。途中も手術後、首の後ろや太ももの防水防止の補綴や風邪などを防ぐためにクチ子を注入して処置は全て終った。

「この子は大きいから元じゃきっと太刀将」、「この子は痩せてて心配」。捕獲器に戻される猫をボランティアの女性がとよきに優しく抱き上げ、ほおを寄せた。「元気で頑張ってね」。

数時間後、別室で自らぬれた猫たちは各保護団体や同様の自治体職員に引き渡され、1口猫子を見た上で問題がなければ捕獲された場所に返される。その後は「地域猫」として一代限りの生を送る。

命のためにできること

地域で愛される存在に

全国で殺戮分される猫は毎年数万匹に上り、その約半数を猫が占める。この不平等を止めため、公益財団法人「ハーフ・ハーフ基金」(北里町)が今春、野良猫に避妊去勢手術を施して地盤に居る事業を福岡県筑後市で始めた。毎月4日間、県内外の保護団体が捕獲した猫を会場へ運ぶ。その数、1日で100匹を超えることもあるという。現場を訪ねた。(文・竹添セイ、撮影・穴井友紀)

猫の力

どうぶつ基金は全国の動物病院1,79カ所と協力し、各地の保護団体が捕獲した猫の避妊手術費用を負担。毎年数万匹に手術を施している。今年4月に始めた野良猫を1カ所に集めて一斉に手術を施す事業は、一定の条件を満たす地域を毎年選定し、1年間実施する仕組みだ。今年は福岡県筑後市のほか、宮崎市と大阪市が選ばれた。筑後市では地元の保護団体「リアン」が会場を確保するなど協力。基金側が手術費用を負担するほか、獣医師を派遣する。

耳にV字の切り込みを入れる。形状から「さくらねこ」とも呼ばれる

に運び、スタッフとして処置にも携わる。筑後市では11月までに当初目標の2千匹を達成。目標を3千匹に引き上げた。

取材に訪れた日、会場では神奈川県から参加した獣医師山口武雄さん(53)が若手の執刀を目指していた。「手首はどうひねるの」「これじゃまた合格点はあげられないね」

山口さんは長年、基金と連携して避妊去勢手術に取り組む。「避妊去勢は動物愛護の第一歩」。そう話す山口さんの技術は他の獣医師から「神の手」と

A group of children wearing surgical masks and caps are gathered around a table, focused on a task. In the background, there are several boxes of Daiso products, including a pink box labeled 'Daiso' and a white box with a blue cat face.

「」と呼ばれる山口武雄獣医師（左）。  
学ぼうと全国から若手が集う

高齢なまなざして猫の避妊手術を行う獣医師



手に学ぶ若い獣医師たち

たたえられる。避妊はものの数分、去勢に至っては1分もかからない。師事する獣医師は多く、一斉手術の会場もさながら「ドロ道場」だ。若手たちはわざわざでも時間が空くと、その手さばきを食い入るように見つめた。

この日は宮崎市の「宮崎ねこの会」代表が来年度の事業継続性を求める地元市長らの要望書を持って駆けつけた。会場は各地の団体が交流する場でもある。

2011年から基金の活動が先行する大阪府内では行政が引き取る猫が8割近く減ったという。活動資金は全て寄付金でまかなわれる。佐々木久理事(61)は「施術すれば殺処分はもちろん野良猫そのものが減っていく、鳴き声も震む減る。彼らを地域に愛される存在にしたい」と話した。

# 西日本新聞